

令和7年度「学生と学長との対話－学生交流会－」概要

11月27日、「令和7年度 学生と学長との対話－学生交流会－」を学生24名と学長や理事ら教員7名が参加の下、五福キャンパスで開催しました。この交流会は、学生と学長が対話を深め、学生の意見を大学運営に反映し本学の教育の質向上を図ることを目的に毎年企画・実施しているものです。

今年度は、①アクティブ・ラーニング教育、②データサイエンス教育、③地域の企業や自治体と連携した教育、④グローバル教育の4つのテーマについて、グループディスカッションを行いました。

その後、『ワクワク感を後押しする教育とは？』という視点で、富山大学の教育・学生支援の現状や今後目指す姿について、テーマ毎に発表を行いました。学生の発表に対して、学長からは英語教育の重要性に加え、「授業だけでなく学生生活を能動的に過ごして欲しい」とのメッセージが伝えられました。

学生から発表があったテーマ毎の提言や課題、本学に期待する点は以下のとおりです。

アクティブ・ラーニング教育

■意見交換の内容（本学に期待する点）

- ・学内で行われている活動（ボランティア活動やフィールドワーク等）が、他学部の学生に十分に伝わっていないのではないか。
- ・他学部の学生との繋がりを増やし、専門の異なる視点から意見交換する場があると学びが深まるのではないか。
- ・学生自身がアウトプットの機会（反転学習、ジグソー法など）をもっと増やしてほしい。
- ・文系学部の学生にとってPBL等の実施時期が就職活動時期と重なり、参加を躊躇するケースがある。また、学部によっては、課題とするテーマが、自分の専門分野とどう関連するかイメージできると、様々な学部から参加があるのではないか。

■学長のコメント



アクティブ・ラーニングの意義は、専門分野や立場の異なる人と対話を重ねながら課題解決に取り組む点にあります。大学は、多様な学部・分野の学生が集う場であり、その環境を生かした学びは大きな価値を持ちます。在学中に得た意見交換や協働の経験は、卒業後、社会で働く際にも必ず役立つものです。本学としては、学生の主体的な学びを一層促進できるよう、学部横断型の取り組みや情報共有の仕組みを充実させていきます。

データサイエンス教育

■意見交換の内容（本学に期待する点）

- ・「データサイエンス」という言葉や関連用語が抽象的でイメージしにくいので、丁寧な説明があるとよいのではないか。
- ・入学時点で学生の基礎知識に差があるため、事前アンケートなどで理解度を把握することが必要ではないか。
- ・Excelでの計算作業が受動的になりがちで、目的や意義が見えにくいいため、自分たちでアンケートを取るなど、身近な実データを用いた能動的な演習を取り入れると、データサイエンスの一連の流れを体験することができ、効果的ではないか。
- ・専門分野（学部）と関連づけたデータサイエンス教育があると、理解と関心が高まる。技術進歩が速いため、授業内容を継続的に見直す仕組みがあるとよいのではないか。

■学長のコメント



データサイエンスは、特定の専門分野に限らず、現代社会で不可欠な基礎的素養の一つです。データを基に考え、分析し、改善につなげる力は、今後あらゆる分野で求められます。2040年頃には、データサイエンス、AIに関わる人材が339万人不足すると言われていています。学生の皆さんが感じている課題は、教育内容を見直す上で大切な指摘だと受け止めています。本学では、実社会と結びついた分かりやすい学びを通じて、データサイエンスの本質を理解できる教育を推進していきます。

地域の企業や自治体と連携した教育

■意見交換の内容（本学に期待する点）

- ・地域活動に参加する学生が、一部の学生に偏っているため、学生のモチベーションを上げるきっかけを作る必要があるのではないか。
- ・座学よりもフィールドワークを含む授業の方が印象に残り、満足度が高い。座学（前期）と体験型学習（後期）を組み合わせた授業があると地域への魅力や理解が深まるのではないか。
- ・学部によって地域連携の機会に差があるため、先行している学部のノウハウや取組事例を他学部にも共有できればよいのではないか。また、大学の取組が学生に十分に届いていないように感じるため、積極的な情報発信があればよい。

■学長のコメント



地域との連携は、大学教育を社会と結びつける重要な要素です。地域の企業や自治体との協働は、学生にとって実践的な学びの場となり、地域にとっても新たな価値創出につながります。本学では、こうした取り組みをより多くの学生に開かれたものにするため、情報の集約や共有方法の改善を進めていきます。地域とともに学び、成長する大学を目指して取り組んでいきます。

グローバル教育

■意見交換の内容（本学に期待する点）

- ・1年次の教養科目として、日本人学生と留学生が合同で行う授業（単位付）があるとういのではないか。その際、日本人学生と留学生の数は同程度になると十分に交流ができるのではないか。
- ・留学に対して、費用・手続き・実態が分からず不安が大きいため、卒業生や在学生の留学経験を共有できる、OBやOGとの交流が仕組化されるとよいのではないか。
- ・奨学金や支援制度があっても、情報が学生に十分に届いていないのではないか。

■学長のコメント



これからの社会では、国や文化の違いを越えて人と関わる力が不可欠になります。語学力はその一部に過ぎず、大切なのは「伝えようとする姿勢」と「相手を理解しようとする気持ち」です。完璧な英語を話す必要はありません。間違いを恐れず、まずは一歩踏み出してください。留学生との交流や海外経験は、皆さんの視野を大きく広げてくれるはずです。大学としても、より身近で参加しやすい国際的な学びの環境づくりを進めています。例えば、“気軽に参加できる英会話練習イベント”として「国際機構 de 英会話」を、“国際コミュニケーションスキル等を養うイベント”として、大学院生を対象に学内で行う「ONIGIRI SEMINAR」や海外協定校と連携した「GAKU TALK」を開催しています。皆さんの挑戦を、心から期待しています。

最後に

本学では「データサイエンス教育」「アクティブ・ラーニング」「英語教育」を教育の3本柱として推進しています。また、地域とともに学び成長する大学であるとともに、留学生との交流や海外経験も重要と考えています。

今回の意見交換の内容を踏まえて、この教育の3本柱等の更なる充実・質向上に向けて取り組んでまいります。